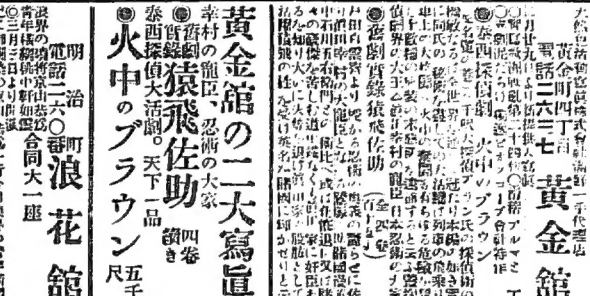


第四百十九席 早川貞水口演

引捕へ、小栗の悪事を遂一自決せしめくれんと早くも決心致しました

大正館

電一〇五〇町
 京阪電車山名土出頭夫人津留彌大食館
 入指他十餘人、中、藤原氏、伊豫守、
 申受候御意下是料として
 申渡し候。午後一時、同前拘はてやみな
 午後三時、同前拘はてやみな



故、十分の手當の上、申老に昇進せしめ、五百石御加増、千五百石を下し置かれ、又中將藤兵衛は三郎兵衛よりの言上に依つて、百石に減り立てられましたから、藤兵衛大變な立身でございます。此方は三郎兵衛より證據の品は是れくの所へ隠して藍いたまひ申し上げましたから、種々に妾を授へ、三人二人と組々になり三郎兵衛も其中に加はり、大勢かの地へ赴いて、證據の胴藏笥をは、小石川の御館へ持歸りました。併し是だけの證據では、まだ再調を申し渡す譯にも往かねから、光國公御心配あそばされ、尙ほ確かな證據を得ないと思召して居ると、茲に先年越後を浪人した關根次郎と云ふ者あり、是は押籠になつた若殿三河守へ眞影流の御指南を申し上げて居りましたが、若殿押籠と共に、御家の人致し今は虛無僧の姿となり、木細の衣類にて、白の手甲、脚絆九帯の扮装にて、尺八を持ちて天竺を頂きつつたから、一寸飲直して、是から吉原へ繰込むと云ふことに、船中詮議一決したのである。此處へ上つたのだ」と先に立つたる者は見れば、是れぞ小栗実作の謙儀中、酒井雅樂頭御用人新使河原三右衛門方へ密書を持つて上府したる、目附役大野次郎兵衛で御坐います。今少し好い體裁で下役の名兩名三名、觀者が四人、棧橋を上つて行く、桜の上に此容子をを見て居つたる關根次郎、「ハ、ハア乃公が越後家で、近習頭取役を勤めて居た時には、彼奴は足輕をして居つた大野次郎兵衛と云ふ者だ、悪人に累美作に加担いたし、今では時を得頭に、下役殺者などを引連れ、客を散らしして居ると見える、彼の容子にては、吉原町へでも行くやうである、世の盛衰はと言ひながら、忠臣いづれも見える影ともきに引換へ、惡人は斯くの如く脱兎跳梁、併しながら夫何ぞ何時までも悪人を助けるもののあるべき、斯りや彼奴を處で

つたが何者だが解らないさうだ
▲隨着參國王の宿屋 今のセルビヤ王が昔旅落してをつた體で自ら自毀の名残を止めてゐる巴里の或隨着の家は近頃やかましい名物となり毎日澤山の聖物が押し寄せて四番はシコマ心づけに有つくのでその様は大變上がったさうな

花柳病專門 京城驅蠱院

院長 內村 東

梅瘡、下疳、橫痃、淋病、五九病、
泌尿器病、肛門病、皮膚病、婦人病、
梅毒、骨節痛、各種疑難雜症
六〇六注射每日●包皮其他手術
每日午後

(南大田通り農工銀行裏)
京成長谷川町一番地

最新刊一名 醫者のくるまで 定價金五錢 郵税二錢

容 室谷先生は本書の冒頭に左の如くお話されました「家庭に於ける衛生及救急に就ては申上くることは仲々に多いが大要を記載することにした」幸に貴誌を賜り各自衛生の保全に勉めらるゝなれば此の上もない、猶豫め知りしがれたとして別段御損にもならない事かと思ふ「醫者の来るまで素人の救急法」本書を置いて他に之れに優るものはない、室谷先生の御話の一端を拜借し、萬戸必携の珍寶として江湖の家庭にお勧め致します

發行所 京城日報社代理 東京 振電日皇京城三〇〇番

油醬上最



位本質品的對絕

譽名の一唯界造釀滿鮮

會進共產物^朝年五始於

領受牌金

港川仁元造釀

式株油醬本日

番四七一減京營振番一五七話電

張出城京

番三二五城京營振番五四二話電

朝鮮郵船

朝鮮郵船

思清丸	三月八日	元山發
環丸	三月二十日	元山發

思清丸	三月八日	元山發
環丸	三月二十日	元山發

三浦丸 三月五日 釜山行
長崎川崎汽船、三浦丸、倉敷丸、本行
母州丸 巨港丸 每三山行

三浦丸 三月五日 釜山行
長崎川崎汽船、三浦丸、倉敷丸、本行
母州丸 巨港丸 每三山行

公州丸	三月 六日	木詣迄
一各港經由濱州或口東國一		
全州丸	三月 八日	仁川迄

公州丸	三月 六日	木詣迄
一各港經由濱州或口東國一		
全州丸	三月 八日	仁川迄

江華局	桐西島	海州行
三月十四日	三月十四日	群山監
三月八日	三月八日	若松監

江華局	桐西島	海州行
三月十四日	三月十四日	群山監
三月八日	三月八日	若松監

立神丸	三月九日午後十時出帆
門司、神戸、大坂行	三月七日午後五時出帆
小倉丸	

立神丸	三月九日午後十時出帆
門司、神戸、大坂行	三月七日午後五時出帆
小倉丸	

大兵 九 每月二日九日廿六日 午後十時
廿一日廿六日 出帆

大兵 九 每月二日九日廿六日 午後十時
廿一日廿六日 出帆

船にて青島行定期船
 と同船運賃にて通し輸送御厚扱可仕候
 旅津、清津、浦鹽行(元山出帆)
 月 日 後九時

船にて青島行定期船
 と同船運賃にて通し輸送御厚扱可仕候
 版津、清津、浦鹽行(元山出帆)
 月 日 後九時

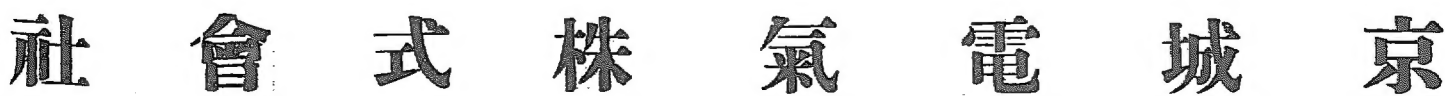
阿波國共同汽船株式會社
本則一丁目電話二〇八番
仁川代理店 山下回漕部

阿波國共同汽船株式會社
本則一丁目電話二〇八番
仁川代理店 山下回漕部

行一處

行一處

100



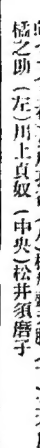
最も振つた四十二三年△當つた中村雁
十郎△十四日續いて九日間大入滿員札
止だつた後藤の過去の罪△芝居よりは
寄席が繁昌△京城の人は演藝に冷淡

▽始めて芝居が出来

たさふの居留民は驕いだものである。その後四十年頃から露座が出来、張笈座、本町座が出来、俄成座が出来たのだが何れも焼けたり、潰れたりして今無つてゐるのは露座と御成座で、孰れも豪盛不振照つた様子は遺蹟な事だ。さうして京城の劇界も今日では聊か活動寫真に壓され氣味で活氣に乏しいけれども一時は頗る盛んな時代があつたものだ。それは併合前朝鮮開地としての活氣よく國民地的の色彩の最も濃厚であつた時代で内地の省のある幾人でも此の景氣に吊られて玄聖漢を渡つて來たものが甚だ少なくなくかつた。此の時分には活氣のいいせいか相當の人数あり今日の如くこせ/ゝしてゐなかつたので悠くろと構へて芝居見物に出掛け人も可なりになり成功して歸つた者も大分あつた。

の主なるものと言へば舊派で

松之助、座の義士、中村時子一座の千住芝居、中村信濃、中村福圓、中村藤十郎一座、市川服若に頼助一座、能役者の中村住樹一座、所蔵の座、中村屋敷一座、此の外大阪能役として有名な座三郎一座が、仁川にまで來たが京城には來なかつた。新派では川上貞奴に後藤良介、成宮、關の座から脱した清川麗水、北村正成、駒、無谷武雄、木村猛夫、伊藤文孝、中京成美園の西萬兵衛、村田正雄、高部幸次郎、翠つた丸山文雄などが相隨いて來た。此の中舊派の方では頼圓、雁十郎などが各二三回來たものと新派では後藤、村田、北村、伊藤などは何れも二三回宛廻つて來た。此の中、新舊を通じて連日大入浴員の盛況が三十餘日續いて稀有の當りを



を博した。その後、村田正
『過去の罪』を香座に上演し

ツとなりて内地まで持ち廻

九月間は連日溝長の村に繰り
た。此の狂言は後藤の當り

劇で此の興行日數正に十四

本紙に連載された例の「過

は後藤良介で、それは大正

司王しおう長ながくく廣ひろくく

たのが中村雁十郎、属國、

の人には演藝に冷淡

去の罪△芝居よりは

九日間大入満員

二年△當つた中村匠

三

100

狂言を提げて来て、
 遊戯を續けたものはいさななく、満
 座もあつたものなどは多々、曉
 醒もなかつたのだ。これは、京城
 本當の芝居見があないにも因る
 ところが興行者側にしても役者にし
 て、さういふに残念な事だつたらう。
 二十日位で狂言を取り替へ差し替
 へてゆくから、自然大道具、小道具
 共、其などにも無理が生じて舞臺に穴
 があはれない。従つて劇そのもの

狂言の提げようは、二連
 同一狂言を持ち堪へる事が出来
 ない。確證を提げし事はその當
 然、社並ひに吾々社員の私かに誇り
 したことであつたのだ。是まで

後援も大分あつた
 様だつたがいづれも可なりの成納
 収めて行つた京城で興行師の困る
 は或る立物を内地から呼ばうとす
 と片邊へと言つて片邊の旅費が要
 した大なる座になつてくるその片
 邊まで持つてくるので先づその片
 旅費に重い負擔を感ずる。それに
 立物になると内地で取る給金大
 割なり六割などの増給金を要求す
 るれども、として大物が來たここ
 が七百も、遣入れは満員になる様
 面。

幸を與へたのは朝鮮國の延平府
 と上山草人、上山浦路、藝者座一
 と島村抱月、松井須磨子、瀬田正
 郎）が來た事であつた。是等は各

(以下三回と讀く)

同 一 員 合 組 屋 宿 城 京

電話一〇三八

電話一六八一、二三八一番

[illegible]

電話二四八三六六番

荒井牛乳販賣部

廣州一〇四廠

